

---

# 好みのタイプは何ですか？

祀希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

好みのタイプは何ですか？

### 【Nコード】

N5768W

### 【作者名】

祀希

### 【あらすじ】

「ファンクラブを立ち上げませんか？」 天然生徒会長と不良

くんたちの駆け引き。学園コメディ、ラブかは不明

## マドンナの受難

「ヤベーよ、マジ高梨さんキレー」

「あんな美人とヤリてえよな」

「や、おまえじゃ相手されねえだろ」

「うっせ！ おまえだって相手にされねえよ！」

「うっせえな！」

「あの、盛り上がっていらっしやるところ悪いんですけど」

「げ、生徒会長……！」

「その露骨に嫌な顔は気にしないでいて差し上げます。ところで、二年生男子の皆さま方」

「な、なんだよ？」

「高梨美春ファンクラブなるものを立ち上げる気はございませんか？」

「はあ？」

「ファンクラブう？」

「もちろん、美春の迷惑も考えずただ追いかけてまわすだけの低俗な集団のことではございません。美春の好みのタイプに近付くことで先ほどの妄想を現実にするための一大プロジェクトです」

「いや、先ほどの妄想って、なあ？」

「それこそ一そくというか、なあ？」

「おだまりなさい。あなた方が美春の裸体に触れたくないというならそれでかまいません。美春は好みのタイプにはとことん甘いですから、どんな『お願い』でも聞いてくれるでしょうけど。美春にあんなことやこんなことをしてもらえるなんて男冥利に尽きるのではないかと思ひ、声をかけただけです。しか興味がないのなら仕方ないですね。三年生の先輩方に、」

「ちよつと待て。その話、詳しく聞かせてもらおうか」

こうして学園のマドンナ、高梨美春ファンクラブが下心の元に結成された。

「というわけです。ご理解いただけましたか？」

「なにが、ご理解いただけましたか？ なわけ？ 勝手にファンクラブとか気色の悪いもの作らないでもらえる？」

あら、と呑気に首を傾げる友人に美春は頭を抱えたくなる。入学してすぐに仲良くなったにこの友人の異常さは理解しているつもりでいたが、甘かったようだ。まさか二年生にして生徒会長に任命されるという快挙を成し遂げて早々、ファンクラブを立ち上げるとは思ってもみなかった。

「大丈夫です。美春には迷惑をかけませんから」

「ファンクラブの存在自体が迷惑なんだけど」

「心配しないでください。美春に危害が及ぶ事態にはなりません」

だって、と彼女は綺麗に微笑んだ。

「男なんて皆、ただの馬鹿ですから」

## 静寂系男子！

「美春の好みのタイプのお話ですけど」

机の上で緩く手を組んだ彼女が言う。

彼女が学園中の男子に声をかけ始めてから一週間。すでに学園の半数以上の男子が高梨美春ファンクラブに所属していた。そのあまりの手際よさに美春は呆れているようだったが、彼女にそんなことは関係なかった。

「美春は寡黙な人が好みのようです」

かもく？　なんだそれ？　と騒ぎ出すファンクラブメンバーをぐるりと見渡して彼女はもう一度口を開いた。

「申し訳ありません。あなた方の脳ミソでも分かる言葉でお話ししましょう。美春は静かな人が好みのようです」

「静か？」

「喋るなっということか？」

「もちろん違います。たとえば休み時間に低俗な話で下卑た笑い声をたてるのをやめるとか、昼休み購買限定焼そばパン争奪戦をやめるとか、そういったことです。読書に勤しめとはいいませんが、せめて上品かつ静謐な空気を醸し出すべきかと」

彼女の言っていることを半分も理解できていないが、とりあえずおお！ 感嘆を装ってみる。

「手始めに学校に水着姿の女性の載った雑誌を持ってくるのをやめることから始めましょうか」

「な、なぜそれを……！」

「あれだけ堂々と見ていれば小学生でも気付きます。やりたい盛りなのは分かりますが、せめて学校内で見るのはやめましょう。各家庭で存分にお楽しみください。校内にあなた方の下卑た笑い声を響かせて美春の繊細な耳に負担をかけたくないでしょう？」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。透けるように白い肌、艶やかな黒髪、膝を隠す程度のスカートからのぞく細い足、物憂げに外を見つめる視線。清楚だとか、か弱いだとかそういう言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するため  
に。

次の日から、男子が授業間の休み時間に読書をする姿が多く見られるようになる。学園始まって以来の図書館の利用率に司書の教師は目を丸くした。



真面目系男子！

「皆さん、なかなかよい調子です。最近の男子の様子が違つと美春もいぶか、……喜んでいました」

おお！ と野太い歓声があがる。

「ですが、一つだけ欠けているところがあります」

「なんだよ、生徒会長」

「オレら結構真面目になつたる？」

「そうそこです」

「そこ？」

「皆さんの服装です。読書をする寡黙な男になつたというのにそんなダボダボした格好をしているのは合わないと思いませんか？」

「ま、まあそりゃなあ……」

「おかしいつちやおかしいよな」

「せめてそのズボンだけでもどうにかならないでしょうか。極限までおろしたズボンの裾で床を掃除してくださいるのはありがたいのですかま、あまりにおろしすぎて下着が見えている方もいらっしやいます。美春にそんなものを見せてあなた方は恥ずかしくないのですか？ ベッドの上ならともかく公衆の面前で、ですよ？ そういう羞恥プレイがお望みなら後々美春に『お願い』すればよろしいでしょう？」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

陶器のように白い肌、甘やかな香りを纏う黒髪、学校指定の紺のハイソックスが包む細い足、静かに本の上の文字をなぞる視線。清らかだとか、儂げだとかそういう言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するため

次の日から、人が変わったように制服を正し始めた男子一同に生徒指導の教師が泣いて喜んだという。

ワイルド系男子！

「皆さん、素晴らしいです！ やればできるんですね！」

頬を上気させ嬉しそうに微笑む彼女にメンバーはまあな、と得意げに胸を張る。

「では次の段階に入りましょうか」

「今度はなんだよ？」

「髪の色を直せとか？」

「ピアスを取れとか？」

「いいえ。あなたの方が、たとえ日本人には似合わない髪色をしていても、ピアス皮膚炎と呼ばれる金属アレルギー性の皮膚炎になる危険のある物体を耳や口や鼻につけていようと文句は言いません。校則にも禁止の旨は書かれていますから。そうではなくて、来週行われる体育祭のことです」

「ああ、あれか」

「一日かけてやるヤツだろ？」

「美春は勉強ができる人はもちろんですが、スポーツのできる人も好みます。文武両道というやつですね。一位を争い必死に戦う姿を格好良いと思う傾向にあるようです」

「だりいからサボろうかと思ってたんだけどなー」

「だよな、外とかあちいし」

「あら、美春は日に焼けたワイルドな人も好きですよ？ 巷では草食系男子というのが流行っているんですけど、軟弱な男は好みじゃないそうです」

ふむ、と頷くメンバーは気付いていない。寡黙で静謐な空気を纏い、かつワイルドな男が好みという矛盾に。いや、彼女の使う言葉の意味を半分も理解できていないというのもあるが。

彼女はにこりと笑って続ける。

「これを期に美春にアピールをしてみませんか？ 普段は読書をしてるけど、実はスポーツもできるんだぞ、と。ああ、もちろんサボりたい方はサボってくださいってかまいません。他の方が美春の目に止まったとしてもわたしの責任ではありませんし。抜け駆けだなんだとファンクラブ内で揉め事を起こさないでくださいね」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

太陽の光に煌めく肌、高く結われたポニーテールが揺れる華奢なうなじ、ジャージの短パンからのぞく綺麗な膝、眩しげに自分たちを見つめる濡れた瞳。可憐だとか、純潔だとかそっぴい言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するため。  
に。

次の日から、休み時間の度に外に飛び出し体育祭の出場種目の練習を始める男子の姿が見られるようになった。ちなみにその半数以上が髪を黒に戻しピアスを外していたことに生徒指導の教師が泣いたのは余談である。

## ワイルド系男子！（後書き）

ピアス皮膚炎は、ピアス穴が上皮化するまで衛生を保つなど注意すれば大丈夫だそうです。

生徒会長さまのただの脅しとお受け取りください

## マドンナの不安(1)

「……迷惑かけないんじゃないの？」

「かけていないでしょう？ 彼らは本当に単純馬鹿、……いえ素直な人たちですよ」

「さつきから種目が終わる度にあたしの方を見てくるんだけど。キモいんだけど」

「あら、それは美春が美人だからに決まっています。彼らも美春に視線を送らずにはいられないでしょう。微笑んでさしあげたらどうですか？ やめてくださるかもしれません」

「嫌よ。付け上がるだけでしょ」

隣に座る友人に美春はため息をつく。

最近学園がまともになつてきたのは認める。窓ガラスも割れなくなつたし、下品な会話も聞こえなくなつた。元は男子校だったこの学園が共学になって五年、女子には過ぎづらかった学園生活もマシにはなつた。でも最近いやに視線を感じるのだ。そちらに目を向けるとわざとらしく本に目を戻す輩がいくらなんでも多すぎる。少し気になる程度とはいえ、自分の知らないところで何か膨大な犠牲を払っている気がしてならない。

「今年は平和な体育祭になってよかったですね。去年は散々だったでしょう?」

「……思い出したくもないわ」

出席率は最悪、辛うじていた生徒も殴る蹴るの大喧嘩をする始末。今年中止にしようという先生方の意見をこの友人が止めたという話も聞いている。

「さあ、美春、わたしたちの出番ですよ」

行きましょう、と柔らかく微笑んで友人は付け足す。

「馬鹿な男子が頑張っている分、わたしたちはせいぜい手を抜いて頑張りましょう?」



## マドンナの不安(2)

「……迷惑かけないんじゃないの？」

「……いえ、わたしもさすがにあれは予想外でした」

あまり単純すぎるのも考えものですね、と顎に指を添える友人に美春はため息をつく。

午前中の種目が終わり、お昼を食べようと教室に戻る最中、どこから出てくるのかぞろぞろと男子が歩いてくるのだ。皆一様に美春に期待の熱視線を送っていて気色悪いことこの上ない。お昼を食べている最中も本を片手にじっと見つめてくるものだから、落ち着かず味もロクに分からなかった。

「彼らには注意しておきます」

「頼むわ」

「会長、」

後ろからかけられた声に友人はにこやかに振り向く。つられて視線をやれば副会長が眉を下げて立っていた。

「長淵くん。どうしました、何か問題でも？」

「はい、放送機器の調子が悪いみたいで。スピーカーの音量が下がらないらしいんです」

「は？　なんでそんなことを会長に報告するわけ？　放送委員がなんとかすればいいじゃない」

機嫌の悪い美春が尖った声を出すと、あうと副会長は一層眉を下げた。

その情けない姿に何か言おうと口を開くのを遮って友人はのんびり言葉を発する。

「それは困りましたね。午後は花形の玉入れもありますし」

「い、いえそれは花形じゃありません。どちらかというと最終種目のリレーの方が……」

「誰が一番速いのかを競って何が楽しいのです？　玉入れの方がよっぽど奥が深いですよ。ただ投げるだけではダメなのです。角度、速度はもちろん他の玉とぶつからないようタイミングを計って投げるのはなかなか大変です」

「そんなこと考えながら玉入れしてるのはあんただけよ。ちなみに玉入れは体育祭の種目にないわ、残念ながら」

それを聞いて友人は眉を下げる。

「それは本当に残念ですね」

心底残念そうな声音だった。

## 問題児くんの噂（1）

「会長！」

放送席と紙が張られたテントに現れた救世主の姿に放送委員長が泣きそうな声を出す。

「話は聞きました。どうにかなりそうですか？」

「どうやっても音量が上がらなくて……。今代わりのスピーカーを探しに行ってもらっています」

「昼休み終了まで後五分です。間に合いますか？」

「……ど、どうしましょう、せっかく皆やる気を出してくれてるのに……。」

顔を青ざめさせる放送委員長に彼女が顎に指を当てたときだった。

「直してあげよっか」

突然の声に隣に立つ副会長が悲鳴を上げた。

ゆっくりと振り返ると柔和な笑みを浮かべる金髪の少年がいた。最近見かけなくなった派手な髪色と右耳に三つ、左耳に二つついたピアス。学校指定のジャージではなくYシャツに細身のジーンズという出で立ちだが、だらしなく肩に提げられたカバンは学校指定のスクールバックだ。

「り、竜堂……！」

「りゅうどう……、あああなたが噂の」

彼女は緊迫した空気に似つかわしくない声を出す。学校一の問題児といわれる竜堂に対しても彼女はマイペースだった。

「直せるんですか？」

彼女の問いに竜堂はゆるく微笑んで頷く。

「それ旧型でしょ？それくらいなら工具あればどうにかなるよ」

「ではお願いします。どのくらいでできそうですか？」

「部品が壊れてたらどうにもならないけど、二十分もあれば」

「お願いします。五分後に開始予定ですが、まあ時間通りに集まるとは思えませんし問題ありません。放送委員長」

「は、はい！」

「万が一のために新しいスピーカー探しはそのまま続けてください。それから先生方に事情を説明して開始が遅れることを伝えていただけますか？」

「りよ、了解しました！」

敬礼までして一目散に職員室まで駆けていくのを見送って彼女は副会長に向き直る。

「長淵くんは風紀委員長に入場をあまり急かさないうつ伝えてもらえますか。そこで時間を稼ぎます。乱闘騒ぎにならないよう、それだけ見張っってもらってください」

「はい！」

「こちらもこくん、と従順に頷いて校庭入り口で監視役をしているだろう風紀委員長のもとへ駆けていく。

その様子にスピーカーの具合を見ながら竜堂が笑った。

「さすが、噂に名高い生徒会長サマだね」

よく慕わねていらっしやるよじりで、と皮肉げに付け足した。

## 問題児くんの噂（2）

竜堂望りゅうどうのぞむといえは学園中の生徒が知る名前である。

その整った容姿もさることながら、喧嘩は負けなし、女を食い荒らし、顔に傷のある職業の方にも一目置かれる金色の龍。男子生徒からは憧れの目で、女子生徒からは畏怖の目で見られる男。

肋骨の骨折とナイフによる傷のせいで入院し、退院したばかりのその男は工具片手にスピーカーを直していた。

「これで大丈夫だと思うけど」

「ありがとうございます。ずいぶん手際がいいんですね」

「や、これくらいは全然。切れてた回線繋いだけだし」

感心したように頷く今話題の生徒会長ににこりと笑ってみせる。大抵の女が頬を染めるその顔にも生徒会長は表情一つ変えない。ばかりとまばたき一つでやり過ごし、微かに首を傾けた。

「……さすが、」



「はい？ 何かおっしゃいましたか？」

「いや、なにも？」

また微笑むが、生徒会長は興味をなくしたようにふいと視線を逸らした。その姿勢は左腕に収まる腕時計に向けられている。

「さして遅れもせず始められそうです。ありがとうございます、助かりました」

ちらりともう一度時計に目をやって、そしてわざとらしい間を置いてから竜堂を見上げた。

「ところで、竜堂さん。あなた、美人に興味はありますか？」

## 会長さまの般若 そのいち

「おおおい、なんで竜堂さんがいるんだよ？」

「おまつ、あんま大きな声出すなよ！」

「でも竜堂さんだぜ？ あの入院してたんじゃないのかよ？」

「体育祭の日に退院したらしいぜ」

「マジかよ……」

明らかに異質な存在にざわめく室内を気にするふうもなく生徒会長は「さて」と口を開いた。

「みなさん、体育祭お疲れ様でした。今年は乱闘騒ぎもなく無事終わって何よりです。昨年以上に穏やかな体育祭に美春も喜んでいました」

いつもなら図ったように声を揃えて感嘆の声を上げるメンバーが、今日は一人もそれをしない。

体育祭開け、少し日焼けした彼らのもっぱらの関心は竜堂望のフ

アンクラブ入りだった。

「竜堂さんも高梨美春狙いか？」

「マジかよ、オレらに勝ち目ねえじゃん」

「だよなー。あの竜堂さんだぜ？ オチない女はいねえって」

ざわざわと静まらない彼らに彼女は考え深げに唇の下に指を当てた。

それからおもむろに立ち上がると

ガアアアアアン！

教室の隅に置かれた鉄製のゴミ箱を蹴り飛ばした。

ででん、とゴミ箱が倒れ中に入っていた紙くずが散らばる。

一気に静まり返った教室を見渡し彼女は上品に微笑んだ。

「お話をしたいのですけど、よろしいですか」

そのあまりの恐ろしさにメンバー一同かくかくと頷くしかなかった。

## 推測系男子！

「あなた方は程度というものを覚えるべきです」

背筋を伸ばし椅子に腰かける彼女を見ながらもう騙されねえぞと彼らは思う。

足の甲の形にへこんだゴミ箱にチラチラと視線をやりながら絶対に怒らせてはいけないとも思う。

「体育祭の際も思ったのですが皆さん遠慮というものを知らなすぎます。あれだけぞろぞろと美春を尾行しては美春に気持ち悪、…怯えられるとは考えなかつたのですか。バカですか」

「なっ……」

反論しようとして口を開いたメンバーAを周りが慌てて止める。

怒らせれば命はない。大人しそうな顔してヤツは鬼だ、と視線で会話する。

ぐ、と引き下がったメンバーAに視線もくれず彼女は続ける。

「美春は怖がりですからあまり怯えさせるのは得策ではないかと。嫌われたくはないでしょう？」 第一、先のことまで見越して行動で

きる男性は美春のみならずモテる要因となると思いますが？」

そう言われ死の恐怖に怯えながらもファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

傷をつけるのを躊躇うような柔肌、頬にかかるやわらかそうな黒髪、触れば折れてしまいそうな細い足、頼りなげに瞬く黒目がちの瞳。儂げな彼女相手に死の恐怖を感じることはない……！

少々テンパった彼らの思いは一つだった。

全てはこの恐怖から逃れ、薔薇色いちゃらぶ生活を送るために……

……！

現実逃避を始めた教室の片隅、壁に寄りかかるようにして立っていた竜堂だけがニヤリと口元に笑みを浮かべていた。

余談だが、少し思慮深く且つレディーファーストの精神を覚えた息子（または兄、弟）に各家庭は慌てて洗濯物を取り込んだ。

……雨は降らなかった。

騎士系男子！

「雨が降ると嫌なので、」

会長の突然の一言にファンクラブメンバーは首を傾げる。  
最近は一瞬もない快晴が続いている。天気予報も向こう一週間は  
晴れが続くと言っていた。

「雨の心配はねえんじゃねえか？」

「記録的豪雨ならず記録的快晴だってテレビで言ってたぞ」

「母ちゃんは最近外に洗濯干さねえけどな」

「おまえんちもか。うちも最近室内干しだ。家の中が湿気っぽい」

「うちもそうだけ」

「……皆さんがご家庭でどう思われているかは十分理解しました。  
だからこそ次はこの作戦でいこうと思います」

何故か憐れみの視線を向けられ彼らは戸惑う。

「レディーファーストを極める気はございますか」

続けられた言葉に彼らは困惑を深めた。

「れでいーふぁーすと?」

「それって騎士が云々のヤツか?」

「その通りです。皆さま博識でいらっしやる」

ぱちぱちと小さな拍手つきで誉められ「いやあ」と一様に照れるファンクラブメンバーに竜堂がくつくつと肩を震わせる。

それをあっさりスルーして会長は言葉を続けた。

「実は女性を盾にするため、毒味をさせるため、等々真実は酷いものですがそれはこの際無視しましょう。……皆さん、目の前で重い荷物を持っている女性がいたらどうします?」

「素通り」

「見なかったふり」

口々に答える彼らに彼女は上品に微笑んだ。すぐさましん、と静寂が訪れる。

少々おバカな彼らだが、危険察知能力は日々磨かれている。

「荷物を持つてあげる、が正解です。皆さんにデートする機会があるのなら彼女さんを歩道の内側を歩かせる、エレベーター内では少し彼女さんの方に体を向けてあげる、というのでもいいでしょう」

ふむふむ、と彼女持ちのメンバーが頷く。

「ほんの少し女性のことを考えた行動をとる、それが乙女心を掴むのです!」

おお! と野太い歓声が上がった。中にはメモをとる者もいる。

「もちろん美春限定ではいけません。全ての女性に優しくしなくては」

「なんでだよ?」

「あら、あなたは『あの人、わたしだけに優しいわけじゃないの……?』と可愛らしいヤキモチを焼いてほしくはないですか?」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

ミルクのように白い肌、ふわりと靡く黒檀の髪、最近のあたたかさでほんの少し短くなったスカートから覗く綺麗な足、照れたように笑む丸い瞳。お姫さまだとか、妖精だとかそんな言葉が似合う美



人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことや果てには嫉妬をして  
もらうために……！

次の日から記録的な豪雨に見舞われたその地域で、原因を知らぬ  
はファンクラブメンバーだけであった。

## 会長さまの噂

「おい、聞いたか？ 会長の噂」

「ああ、男と歩いてたつて話か？」

「え、なんだそれ！ それ聞いたことないぞ！」

「なんだ、違うのか？ この前駅前でモデルっぽい綺麗な男と歩いてたつて。仲良さげだったつて話だぞ？」

「……まあ、会長もなかなか美人だもんな。彼氏くらいいるよな」

「高梨美春の方がインパクトあるから忘れがちだけどな」

「高梨美春を薔薇とすると会長は百合っぽいもんな」

「なんだおまえ、そのちょっと頭良さげなたとえ方は！」

「ふっ、そんなに褒めるなよ。照れるだろ。でもほいだろ？」

「あー、ばいな。会長は百合っぽい。こう一輪だけ咲いてる感じ」

「だよなー」

「その話、詳しく聞かせてもらえるかな」

「りゅ、りりりり竜堂さんっ……!!」

「そ、その話って……」

「会長の噂。ものすごく興味あるんだけど？ あ、もちろん君たちの会長に対する見解にもね」

後にファンクラブメンバー男子生徒二人は地獄を見たと語る。

清潔系男子！

「わたしとしたことが！ 判断を誤ってしまいました！ なにより先にやるべきはこちらでした！」

「なんだよ、会長」

「どうしたんだよ、会長」

「みなさん！ ハンカチティッシュをお持ちですか！」

「はあ？」

「ハンカチい？」

「ティッシュう？」

訝しげに眉を寄せるメンバーに会長はおぞましい！ と言わんばかりに顔をひきつらせた。その時ズザッと椅子ごと後退するのも忘れない。

「みなさん、その手に！ いったいどれだけの細菌が潜んでいるとお思いですか！」

「はあ」

「手を洗い服で拭いては意味がありません！ 洗いたてのハンカチを持つていることはモテる男の大前提だと思うのです！」

最近のファンクラブ活動が『高梨美春にあんなことやこんなことをしちゃおう』作戦から『モテる男になろう』作戦に変わってきていることに気付く者はいない。

「是非ともハンカチを！ ティッシュなどと贅沢は言いませんからせめてハンカチを持ってきましょう！」

「そんなことよりさ、会長」

珍しく熱く語る彼女に竜堂が口を開いた。ファンクラブ会議中は基本的に一言も発しない竜堂のこれまた珍しい発言に教室は静まり返る。

ファンクラブ内で金髪ピアス制服着崩しを唯一保つ竜堂はメンバーの間ではもはや伝説に近い。いつ般若会長が降臨するかとハラハラしていた彼らはいにそのときがくるのか、と一斉に一歩会長から距離をとる。巻き添えを食らっては命が危ない。

「男と歩いてたって聞いたんだけど？ いったいどこの誰？」

それまで一人白熱していた会長はその問いで一気に熱が冷めたら

しい。  
いたって冷静に男？ と顎に指を当て首を傾げた。

「駅前で男と歩いてた会長の目撃証言があとをたたないんだけど？」

「はあ。一つ聞きたいのですが、その男性がわたしの婚約者であろうと親戚であろうと下僕であろうと」

「今、会長下僕って言ったよな」

「言った、たしかに言ったぞ」

ざわめくメンバーちらりと見てから彼女は穏やかに口を開いた。

「あなたになんの関係がある、「元気でやってるかい、僕の子猫ちゃん」

会長の声を遮る甘い声。甘ったるいキャラメルのような声に会長が珍しく笑みを見せる。

ひくり、と竜堂の顔がひきつった。

「あ、この前会長と歩いていたヤツだ」

相変わらずの静寂を保つ教室内で誰かがぼつりと呟いた。

## 会長さまの愛の奴隷（1）

これが会長の下僕か、とメンバーが視線を送る。その視線には多大な同情が含まれていた。

教室に入ってきた男は彼らの言葉を借りるならたしかに『モデルっぽい』容姿をしていた。

キヤラメル色のくせつ毛に、ニキビ一つない肌、すらりとした長い手足。顔のパーツは絶妙な位置に置かれ笑うと少し垂れ目になる。その背後には何故か大量の薔薇が飛んでいる。

「僕の子猫ちゃん、こんなむさ苦しいところで何をしてるんだい？」

長い足を活かしてすたすたと会長に歩みよりその頭を撫でる男から注目は離れない。そして相変わらず男の背後には少女マンガよろしく薔薇が飛んでいる。

ちよつとした異空間にメンバーはまた一步距離をとった。

「翔李じゆうりいつお戻りに？ お帰りは三日後だと聞いていましたが」

「子猫ちゃんがお呼びとあらばすぐさま戻ってくるよ。なぜなら僕は子猫ちゃんの愛の奴隷なのだから！」



ココアにあらんかぎりの砂糖と蜂蜜と仕上げにシロップをぶちこんだような甘ったるい声に教室の半数が胸焼けを覚える。もう半数はそこはかとなく漂うキザっぱさに遠い目をしていた。

ただ一人竜堂だけが気に入らなそうに会長と翔李に視線を送っている。

「お仕事はちゃんとしてください。羽貫<sup>はねぬき</sup>さんを困らせてはいけません。どうせまた抜け出してきたのでしょ」

「子猫ちゃんがそう言うなら真面目に仕事をするよ」

でもね、と翔李は甘ったるい声に甘ったるい表情をプラスして會長を抱き寄せた。

「子猫ちゃんとおほんの少しも離れていたくないと思う僕の心が悲鳴をあげているよ。ねえ、僕の子猫ちゃん。子猫ちゃんへの愛に嘆く僕の心、慰めてくれるよね？」

その時、若干一名を除く全員が瞬時に理解した。

コイツ、バカだ。

## 会長さまの愛の奴隷(2)

「翔李暑苦しいんですが」

「照れることないだろう、子猫ちゃん。それとも僕を焦らす小悪魔ちゃんになったのかな」

「どちらでもないので離れてください」

「僕とほんの数日離れていたからって拗ねてるのかい？ 可愛いなあ、僕の子猫キティは」

「……何を言っても通じないわけですね」

椅子に座る会長を後ろから抱きしめる愛の奴隷こと翔李。会長は諦めたように息を吐きながらもそのキャラメル色の髪を撫でている。いちやつくなら他でやれよ的空気も気にならないようだった。

「またすぐ戻るのでしょうか？」

「そうだね、仕事をしなければ子猫ちゃんに叱られてしまう」

「ちゃんと仕事を終わらせてからなら怒りません。また戻らなければならぬのは大変でしょう？」

「ああ、なんて子猫ちゃんは優しいんだろう！ 僕の体を心配してくれるのかい？ ああ、でも大丈夫だよ。子猫ちゃんに会うためならばどんな苦悩も乗り越えてみせるさ！」

「いえ、翔李を追って戻ってくる羽目になる羽貫さんを心配しています。そうじゃなくても自由な翔李に振り回されている羽貫さんが疲労で倒れてもしたら誰が代わりに務められると………聞いてませんね、翔李」

はあ、と会長は盛大なため息を吐く。同情の視線が彼女に集まった。下僕願望のあるこの男よりそれに付き合わされている会長の方が数倍憐れだとさすがのバカ……ファンクラブメンバーにも分かった。

「会長、それ誰」

竜堂の不機嫌そうな問いに後ろから愛の奴隷に抱きつかれたまま会長はきょとんと首を傾げた。

「ご存知ありませんか？ この学園の理事長ですけど」

## 理事長どのの諸事情（1）

私立一葉富蘭学園。

小高い丘に聳えるそこは由緒正しき家柄の御仁が暇潰しに創り上げた学園である。白い外観に立派な校門、十分すぎるほどのスペースを確保した校庭等々まるでどこかの国の城のような佇まいだが、その自由すぎる校風が災いしてか近隣の住人からは「魔王城」と恐れられている。

一葉富蘭の理事長を務めるのは立科翔李<sup>たてしな</sup>、立科家長男坊である。自分に経営は向かないと早々に跡継ぎの座を弟に投げ出し、社内でも有数の優秀さを誇っていた羽貫を引き抜き理事長に就任した変わり者。といっても、彼が仕事をすることはほとんどないが。

「子猫ちゃん、お茶にしないかい？ ダージリン、好きだろう？」

「翔李、まだ途中でしよう。仕事が終わったら付き合ってあげますから、早く仕事にお戻りください」

腕の中の少女に甘く囁けば冷たい言葉が返される。そんな反応にはもう慣れたとばかりにその小さな頭に頬を擦り寄せれば、ぱしんと腕を叩かれた。

「……………翔李」

腕の中に閉じ込めた彼女がじろりと睨んでくるが、怖くはない。けれど怒らせたいわけでもないので素直に体を離れた。彼女から香っていた甘いかがりが遠ざかる。

「すぐに終わらせて帰ってくるから。イイコにお留守番してるんだよ？」

ゆるく笑って頭を撫でれば「大丈夫です」とやわらかな笑みが返された。

まだ仕事があるから、と生徒会室へと向かう背中を見送る。小さな背中、揺れる黒髪。今日も子猫キティは愛らしい。

そうして彼女の姿が見えなくなってから、翔李は細く息を吐き出した。

「さて、竜堂くん、だったかな。わたしに何の用だい？」

目を細めて振り返れば、不機嫌そうに顔を歪める金色が佇んでいた。

## 理事長どのの諸事情(2)

「……ずいぶん雰囲気が変わるんだな」

今までの甘い空気は払拭され、冷たいともいえる空気を纏う翔李に竜堂は白けた目を向ける。

「あの子はどろどろに甘やかすことにしているんだ」

にこりと笑って答えてやれば、不機嫌に拍車がかかったのか竜堂は不快そうに舌打ちをした。威嚇するように見据えても効果がないことにまたイラつき、舌打ちをする。

「君は何を聞きたいんだい？」

「あ？」

「なにか聞きたいことがあったから待ってたんだらう？」

全てを見透かす瞳にまた一つ苛立ちが募る。

「……あんた、会長とどんな関係？」

「どんな、って？」

「そのままの意味だ」

挑戦的で嫉妬を隠そうともしない姿に翔李は苦笑する。

若い、若いなあ。周りを気にせず一人だけを見つめられるほどに白い。いや、それにしてもいふんと黒い執着か。

「わたしは君が望む答えをあげられないと思うよ。彼女とわたしに血のつながりはない。残念ながら兄妹でも親戚でもない」

「……でも会長は、」

「あまりあの子に関わらないでくれるかい、竜堂望くん。あの子もそれを望んでいない。あの子が何者で、わたしとどのような関係であろうと君が関わる権利も必要もない」

雨に濡れた子猫は帰る家を探していた。飼い主はあたたかい寝床を提供した。

言葉にすればたったそれだけの関係だ。実に頼りなげで、依存的

「あの子に近付かないでもらおうか」

雨にすら怯える子猫は、ようやく帰る家を手に入れたのだから。



## 捨て猫の望むこと

「おや」

それはある雨の日のこと。ずぶ濡れ猫と飼い主のお話。

「どうしたんだい、子猫ちゃん」

「……………」

「ずぶ濡れじゃないか。おうちに帰らないのかい？」

「おう、ち…………？ 帰るとこなんて、ないよ？」

「…………子猫ちゃん、うちに来るかい？」

「うち…………？」

「うちにも白い猫がいるよ。仲良くできるなら捨ててあげよう」

「でっ、できるよっ！ 仲良く、するっ！」

「よし、じゃあおいで。あたたかい寝床とおいしいご飯をあげる。子猫ちゃんが望むことはなんでもあげる。その代わり、……………」

差し出された手。

雨に濡れた子猫がなにより望んだあたたかいもの。

清潔系男子！（改）（前書き）

18禁的な会話を含みます。

苦手な方はご注意ください。

## 清潔系男子！（改）

「この前は邪魔が入ったので、」

「子猫ちゃん、邪魔って僕のことかい？」

「もう一度『僕たち清潔大作戦』をやろうと思います」

「子猫ちゃん、無視しないでくれ」

それすら無視して続ける彼女にメンバーは「お、おう」と躊躇いがちな返事を返す。

目の前には椅子に座り膝に乗せた会長の髪をいじりながらニコニコする理事長、後ろからは鬼も裸足で逃げ出すような鋭さで理事長を睨む竜堂。ストレスしか残さないこの状態に彼らは内心発狂していた。

「ハンカチは持っていますか、皆さん」

「僕は持つてるよ、子猫ちゃん。清潔な僕が大好きだろう？」

「翔李が清潔かどうかはどうでもいいんです。それから髪を三つ編みにしないで下さい。何回言わせる気ですか」

「ごめんね、子猫ちゃんの髪を見てるとつい」

「あー、会長？ ハンカチは持つてるけどよ。……とりあえず理事長の膝から降りたらどうだ？」

おずおずと提案する一人に尊敬の視線が集まる。

理事長と会長ときたら作戦会議が始まって三十分ずっとこの調子なのだ。この三十分間に理事長と会長がしたことといったら抱きついたり、頭を撫でたり、指先にキスしたりと吐き気がするほど甘ったるい空気を作り出していただけだ。それに比例して鋭くなる背後からの睨みに彼らはほとんど泣きそうだった。

「でも椅子が足りませんし。翔季を立たせるわけにはいきません」

「優しいね、子猫ちゃんは。僕を気遣ってくれるのかい」

「いえ。この前たった五分立っていただけで疲れたと文句を言ったのはあなたでしょう」

「子猫ちゃんがキスしてくれれば元気になれるとも言ったね」

「してあげたらしてあげたで、あなたは押し倒しました。おかげでお気に入りのワンピースに牛乳がこぼれました」

「それは謝っただろう？」

「お気に入りのワンピースでした」

「分かったよ、新しいのを買ってあげる」

「結構です。これで洋服を汚されるのは十八回目です。この前は顔にかかりました」

「とても扇情的だったよ、子猫ちゃん」

「お黙りなさい」

妖しげな会話に鋭さを増しもはや殺気まで感じる視線を受けながらファンクラブメンバーは思い浮かべる。

仄かに染まる白い肌、黒髪に飛び散る白、誘うように開かれた赤い唇、恥ずかしげに潤む瞳。

ヤバい、会長エロイ。

また鋭くなった気がする視線を浴びながらも彼らは欲望に忠実だった。

もう少し詳しい描写をお願いします理事長……！

それから一週間荒れに荒れまくった竜堂に近付けるものは誰もい  
なかつたという。

## マドンナの憤り

「ちょっとあんた何考えてんのよ」

久しぶりに時間が合ったため彼女と歩く帰り道。詰め寄る美春に彼女はどこまでもマイペースだった。

「何、とは？」

「ファンクラブにあの童堂望を勧誘したらしいじゃない！ なにやってんの、あんた」

「そう言われましても。彼も美人に興味がおありのようで」

「アイツは女なら誰でもいいのよ！ あんた噂を知らないの！？」

「同じ女は二度抱かない、ヤクザの女に手を出した、女泣かせの最低男、等々の噂なら存じ上げておりますが？」

「ならアイツと関わるのを今すぐやめなさい。ろくなことにならないわ」

「大人しい方ですよ。そう悪い方にも見えませんが」



「『悪い方』なのよ、アイツは！」

呑気な親友を殴り付けたい衝動を抑え込もうと拳を固く握りしめたときだった。

「君が一葉富蘭のボス？」

多分に愉悦を含んだ声に振り返った。

## 相棒の娯楽

「ボスカ、と聞かれましても。生徒会長をボスと呼ぶならわたしがそうですけどね」

ボスと呼ぶほどの権限はありませんよ、と笑う彼女に美春は頭を抱えた。

目の前にいるのは竜堂の右腕と噂に名高い神林聡だ。かんばやしちゆうじ金色が代名詞の竜堂とは対称的な銀色の髪、右耳に二つ唇に一つつけられたシルバーピアス、同じく不良校と悪名高い私立八坂学園の制服。噂に疎いわけではない彼女が知らぬはずもないだろうに彼女はただのほんとは笑っている。

「なるほど、たしかに美人だね」

「お世辞をどうも。それで八坂学園理事長ご子息の神林さんが一体一葉富蘭のボスにどのようなご用が？」

「今のオレの肩書きは八坂の理事長ご子息じゃない。二日前に勘当されたところだからね」

「それはお気の毒に。それではただの神林さんがわたしにどのようなご用が？」

「……いや、別に？ 望の荒れた原因を一目見てみたくて」

ニヤリと笑う神林に彼女はきょとんと首を傾げた。

「竜堂さん、荒れていらっしやるのですか？」

## 問題児くんの奇立ち(1)

「ようやく見つけました」

駅前の裏通り。地面に沈めたばかりの喧嘩を売ってきた男たちを、煙草をくわえながら色のない瞳で見下ろしていた童堂はその声に視線を上げた。

表通りの明るいネオンを背後に立つのは、

「会長」

制服姿の彼女に童堂は目を細める。

まだ日付が変わるまで二時間ほどあるが優等生な会長が制服姿のままいる時間帯ではない。明るすぎる夜の街で黒髪に制服姿の彼女はひどく浮いていた。

「童堂さんが荒れているというお話をお聞きしまして。好奇心で探してしまいました。喧嘩姿が見たかったのですが一足遅かったようですね」

この場には不釣り合いなほど穏やかに笑む会長は地面に転がる男

たちに怯む様子もなく竜堂に一步近付く。それからおもむろに手を伸ばしてまだ点けたばかりの煙草を口から取り上げた。地面に落とし踏みつけて火を消しながら彼女は竜堂を見上げた。

「煙草は良くないですね。命を縮めますよ」

「……会長には関係ないでしょ」

「ありますよ。ご存知ですか、副硫酸の方が体に悪いんですよ。わたしの肺が黒くなります」

火の消えた煙草を拾い上げ、学校の鞆から取り出したビニール袋に吸い殻を入れる。

満足そうに頷いてから彼女は首を傾けた。

「ところでなにをそんなに荒れていらっしゃるのです？」

問題児くんの詩立ち(1)(後書き)

煙草は二十歳になってから。

## 問題児くんの苛立ち(2)

「なんで荒れてると思う?」

「分からないからお聞きしているのです。……その前に解放してくださいと嬉しいのですが」

足元には呻く男たち数名、届く光は表通りのネオンの明かりだけ。壁際に追い詰められた上に耳元で囁くように話す竜堂に会長は首を傾げる。その表情に焦燥も羞恥もない。少し戸惑いを見せるだけだった。

それにまた苛ついて、竜堂はほとんど会長の首元に顔を埋めるように近付いた。

「考えてよ、会長」

「生憎ですが、人の心を読む技術はないのです」

至極真面目な顔でそう言って彼女は首元にかかる竜堂の髪を指先で払った。

「けれど想像でお答えするなら、」

ふ、と表情を緩め彼女は囁くように音量を落とす。

「のんであると感じかないわたしに苛ついた、といったところ  
でしょっか」

竜堂はゆっくりと顔を離した。



### 問題児くんの苛立ち(3)

「こんなところにいたのかい、子猫ちゃん。探してしまっただじゃないか」

「翔李」

竜堂が口を開く前に別の声が遮った。チョコレートを蜂蜜漬けにしてその上から砂糖を降らしてクリームに埋めたような甘ったるいそれに竜堂は眉を寄せた。

「駅前で待ち合わせだったでしょう。何故ここに？」

「いやだな、子猫ちゃん。君がいるところに迎えに行くに決まってるじゃないか」

「……お好きにしてください」

それならとばかりに首に絡みつく腕に聞こえよがしにため息をついて、けれど彼女は少し微笑む。

「竜堂さんもお帰りになった方がよろしいですよ。彼らが目覚め

ては面倒ですし、夜の街はあまり安全とはいえません」

「……会長も人のこと言えないでしょ」

制服姿でこんなところに来て、と言外に非難の意を伝えれば彼女は  
おっとりとして首を傾げた。

「わたしには翔季がいますから」

それはただただ絶対の信頼だった。

## 相棒の役割（1）（前書き）

未成年の喫煙は法律で禁止されています。

## 相棒の役割（1）

「うわ、なんだよ電気もつけないで」

煙る室内で煙草をくわえ佇む相棒に神林は顔をしかめた。最近はずこぶる機嫌が悪いと思っていたが今はそれ以上だ。理由は考えるまでもなく一つだから、どうやら自分のお節介が裏目に出たらしい。

「会えなかったのか、会長に」

煙草の煙を外に出すために換気扇を回し、山を作る灰皿の中身を捨てる。まるで母親のように相棒の世話をすることに神林は慣れていた。出会ってから三年、このどこか欠けた男は大きな子どものようなものだ。綺麗な顔をしているくせに、それに似合わず不器用なのだ。家事の類いが一切できない。

このマンションの一室は神林の第二の自宅のようなものだった。素行の悪い神林は勘当まがいの追い払いにあうことはしよっちゅうで本邸にいるよりここにいることの方が多いくらいだった。息子に甘い母が買い与えたここを厳しい父は知らないから尚のこと都合が良かった。

三年前転がりこんできた同居人はここしか帰る家がない野良猫のくせに神林よりここにいることが少ない。どうせ夜中街に入り浸り

喧嘩に明け暮れているのだろうが、そろそろ落ち着いてもいいんじゃないかと思う。

「なんでおまえが知ってる」

不機嫌そのものの答えが返ってきてきて神林は苦笑した。

「俺が会長におまえが荒れてるって話したからな。すっかり美人だな、一葉富蘭の生徒会長サマは。俺結構タイプ、」

頬を掠めた灰皿が背後の壁に当たって割れた。中身を捨てておいてよかったと呑気に考えながら神林は笑う。

「冗談だつて。おまえの愛しの彼女に手え出したりしないさ。諦めるのも惜しいほど美人だけどな」

今度はテーブルに置いてあったグラスが背後の壁で砕けた。

## 相棒の役割（2）

「おまえ、このグラス気に入ってたんだぞ。機嫌悪いからって手当たり次第に投げるのやめろよ。この前の皿も気に入ってたんだからな」

拾える限りの破片を集めながら文句を言うが反応はない。また煙草を取り出して吸い始めたので別の灰皿を出してやる。

「冗談はともかく会えなかったのか？ 彼女、探してみるって言うってたぞ？」

「……会えた」

「なら良かったじゃねえか。なんでそんなに機嫌悪いんだよ」

またむっつりと黙り込む竜堂に神林は尚も続ける。

「喧嘩するなんて野蛮、とか言われたのか？」

「違う」

そうだろうな、と自分で聞いておきながら思う。潔癖そうな少女だったが争い事を毛嫌いしているわけではなさそうだった。大抵の人が顔をしかめるか目を逸らす唇のピアスにも彼女は無反応だったから。

「じゃ、どうしたんだよ」

「……理事長」

「はあ？　理事長？　一葉富蘭のか？　……ああ、なるほど」

ようやく無口な相棒の不機嫌な理由を悟り神林は頷いた。

一葉富蘭の理事長、立科翔李。幼い頃から神童と呼ばれ将来を有望視されていた立科家の長男。高校の理事長なんて器に収まりきるはずもない天才だ。なにを思ったかその地位をすっかり弟に押し付けて高校の、それも地元でも有名な“魔王城”の理事長に就任した彼のお気に入りの子猫の噂を聞いたことがないわけではない。それがあの会長だとは思ってもみなかったが、なるほど竜堂が不機嫌になるわけだ。聞くところによるとそれはすごい甘やかし方らしいから。

「立科翔李に横から奪われたのか？　女泣かせの望が珍しい」

「うるせえ」

「睨むなって。本当のことだろ？　ったく人がせつかくお膳立て

してやったってのに」

投げつけられたボックスティッシュを右手でキャッチして、神林はこれ見よがしにため息をついた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5768w/>

---

好みのタイプは何ですか？

2011年12月24日09時49分発行